

水戸地方裁判所 民事第2部 御中

平成27年11月20日

陳述書

陳述人

大反章生

1、原発事故で避難

私は、2011年3月の福島第一原発事故の発生まで、福島県南相馬市小高区の中の神山という集落で暮らしてきました。昭和12年生まれの76歳です。

南相馬市は、平成18年1月1日に、原町市・小高町・鹿島町の1市2町が合併して誕生しました。北から順番に言うと鹿島町が鹿島区、原町市が原町区、小高町が小高区となり、この3区から成り立っています。そのうち小高区の小高町は「昭和の合併」（昭和20年代末ごろ）で当時の小高町・福浦村・金房村の1町2村が合併してできました。今の小高区は東部（旧福浦村）、中部（旧小高町）、西部（旧金房村）に分かれ、東部地区16行政区の一つが神山です。神山は農村地域で、福島第一原発から北西約10キロそこそこに位置し、34戸が居住していた集落です。浪江町との境界のところに神山の住宅があります。

私は、中学校の教員をしていましたが、水田を隣の富澤宅に小作で作付けをお世話になっていました。退職後はその手伝いと自作で畑作などをやるかわら、お世話になった地域の人々に恩返しをすべく、営農に励む兼業農家の担い手の応援など、地域の奉仕的活動にかかわってきました。

大地震の起きた3月11日、神山は海岸から5キロ離れていたもので津波の被害は受けませんでした。地震による屋根瓦の崩れなどはありませんでしたが、神山全体として倒壊家屋などの大きな被害はなく、人的被害もありませんでした。ただし、神山には4つの班がありましたが、浪江町からの配電になっている1班から3班は停電により水道、電話・防犯無線・テレビの通信網が不通となり、携帯も繋がりにくい状態になりました。

た。4班は通電していました。

暖房・食事等のことや余震の不安から、地区内の神山公会堂が一時的に避難所になり、子どもや高齢者を中心に二十数人が避難しました。夜遅くなってから仕事帰りの人たちから、原発に異変が起こっているようだとの情報がありましたが、行政からは何の指示もないまま不安な一夜を明かしました。

翌12日夕方、原発が爆発して大変なことになっているということで、他地区の人たちが、大動脈である国道6号・114号は大渋滞となり、脇道である神山の道路を通して避難移動を始めていました。南は原発事故地であり、海岸寄りには津波被害のため通行不能だったことから北西方面へ移動してきたわけです。それにつられて、私たちも貴重品や寒さをしのぐものを車に詰め、西の方向に車を連ねて避難を開始しました。

避難所の原町区石神二小体育館は多くの人であふれていました。神山の1班から3班の方はほとんどここへ避難しました。13日、体育館には行政の担当者もいましたが特に情報の報告もなく、三度の炊き出しのオニギリを頂き、不安な気持ちで一日を過ごしました。14日、夜10時過ぎになって、もっと遠くへ避難、との情報が流れ、夜明けを待ちました。15日、小雨・小雪混じりの中、私たち家族3人（母と一緒）は飯舘村を通して福島市蓬萊町の義弟宅に救いを求めました。同じ小高区内に住んでいた娘達家族5人は別の避難所（石神一小）にいましたが、そこで私たちと合流しました。

以後、娘達家族は子どもたちの学校のこともあり、4月いっぱい義弟宅にお世話になり、5月から福島市松川のアパートに移りました。避難生活が少し落ち着いてきたころ悩み苦しんだことは娘達家族のことです。放射線量と小学生の孫たちのことを考えると、福島からもっと遠く離れたところが良いが、親たちの仕事・仕事場も考えなくては、また私たちには90歳を越した母がおり、落ち着く先をどこにするか、苦しい日々、眠れない夜が続きました。

3月は住む所、食べる物を求め探すことに必死な日々を送っていました。一方追い出された里の状況を知りたくても、全く情報がなく、自分が今ここでこのような生活をしていることが何なのかも深く考えることもない毎日でした。しかし、今でも胸につかえるものがあります。それは小学生の孫達の受けている放射線量のことです。子供達の活動範囲は広く、道路の周辺をはじめ、建物の側溝樹木の周りは高線量の所があ

り除染されていません。その除染計画も未定、そんな所で生活しているのが現状でした。

日が続くにつれ、避難先（団地に移った）の生活は耐えがたい苦痛となり、特に母は順応が難しく日に日に気持ちの面、体力的にも弱っていくのが感じられ、この環境を何とかしなければと思うようになりました。母のためには我が家に近く、自然が多い所が良いと考え、現在の南相馬市鹿島区（ここは同一市内であっても大部分が避難区域ではない）への転居を決めました。原発の状況がまだまだ不安定な状態だったので不安を持つての決断でした。鹿島区北屋形字田野入56の、家財道具を置いたまま7年ほど空き家になっていた親類の家屋に入りました。

2、『神山友愛の里通信』を作る

原発事故のあった2011年5月から月1回を目途に、ミニコミ誌『神山友愛の里通信』（以下、「通信」と言います。）を発行してきました。

「通信」の定番の形は、A4の裏表2頁です。最新号は35号（2014年）で、発行日は毎月25日（月末を目標に）です。

神山地区のみんながばらばらになってしまったので、こういう形で絆というか、神山の人達のつながりを回復したいと思いました。

「通信」が生まれる直接的なきっかけは、福島市に避難していた時、たまたま4家族、34世帯の中の4世帯の人たちが福島市近辺にいたことからです

私の家は老人家族で、何かあった時のことを考えて、家の前に住む富澤さんとは代々親戚のような深い交流があったものですから、富澤さんに私の携帯を教えておいたのです。また、何事かあった場合に備え、私の二人の娘の住所と電話番号も教えておきました。

震災後、富澤さんのおじいさんは日立に避難していました（今は沖縄に避難しています。）が、その富澤さんの息子さんから「どこにいる？」という電話を受け、私が「〇〇にいるよ、大丈夫だよ。」と答えたら、誰々が困ってるんだけど、福島のあたりに家ないか？どこか避難する場所ないか？と彼が言うのです。私も知ってる情報を教え、「ところで福島に誰がいるか。」と聞いたところ、誰と誰と誰がいると、彼が教えてくれました。飯坂や伊達市の桑折、福島市の瀬上など、私が一番南のほうにいて、神山の行政区長さんもいました。

そこで、私はその人たちに、今度は連絡しあって4人で区長さんのところに集まろうということになりました。その集まりの時、神山の人は皆どこにいるんだか知りたいから、皆知ってる範囲でそれぞれ連絡し合っ、それで集まった情報で私が連絡網を作ることになりました。これが、「通信」をつくることになったきっかけです。

一番最初の号で、私が挨拶文を書き、一文を送ってくれるように紙面を通して依頼しました。そして、「通信」の表側には神山に関する知ってる範囲のお知らせを載せ、裏側に神山の方の全名簿を作り、現在まで知り得た住所を書き込むようにしました。はじめは、住民の避難先の住所はあまり知らないことから、つてをたどって携帯電話をかけて、皆に連絡先を知らせていいかどうかを聞いて、了解を得た人だけに送りました。了解を得て「通信」を送った方は、住民の半分くらいの人でした。

最初は「通信」の2号とか3号を作るつもりはありませんでした。だから最初のものには、創刊号の表示はありません。ただ、表題の『神山友愛の里通信』というのは私が名前を付けたのですが、それはそれなりの意味がありました。その紙面の中で、「もしよかったら連絡ください」とお願いをしたら、殆どの方が「通信」の中で携帯電話の番号をお知らせしてもいいということになりました。そこで、住所も全部書いて一覧表にし、私のほうで返事のような「通信」出してやりましょうということになりました。

せっかく「通信」を出しても、4通から5通は、住民の方が避難している最中なので住所が変わり、戻って来てしまいました。郵便局の人は親切だったので、最終的には転居先を教えてくださいましたが、役所は、教えてくれませんでした。

すったもんだして、3号くらいになった時にほとんどの方の住所はわかりました。最初のうちは、出すと戻ってくるといようなことが続きましたが、今は戻ってくるようなことは無くなりました。

5号くらいまでは裏は住所録だったと思います。こんなに続くことになるなどとは思いませんでした。

3、「通信」が朝日新聞の記事になる

私も何もしてないよりは、「通信」を作っていた方がいいかなと思いました。当初はパソコンもできませんでした。通信を作るようになって、パソコンをやるようになりました。この朝日新聞の記事（7月22

日) ですが、パソコンをやっている写真が載ってます。

この記事のきっかけは、福島第一原発事故の一年後の2012年4月16日に警戒区域が外れ、一応放射能で汚染された地域の自宅に自己責任で、立ち入ることができるようになったのですが、それで朝日新聞の記者がこの地区に入ったら、私の自宅の後ろのつつじが綺麗に咲いていたことから、驚いて市役所に行って「あんなにつつじが咲いてるけども、あれは一体どういうことなんですか。」と聞いたそうなんです。その時、当時の小高区役所の地域振興課の課長さんから、「大友さんに聞いて。」と言われ、それで、記者の方は、大友さんって何者なんだと思います、私の所に電話をかけてきたのです。「あんなに綺麗なつつじが咲いていますが、あれは一体どういうことなんですか。」と聞かれましたが、私が電話口では簡単に言えないと答えたら、それでは訪問しますということになりました。

記者の方の訪問を受けて、つつじの花を咲かせたわけなど、いろいろ話をしました。それを聞いた記者の方は、「これは大変ですね。ちょうど事故から500日になるから、500日特集を組みたいので、協力して下さい。」と言われたので、「じゃあ、いいよ。」ということになりました。その時に「通信」の話も出てきました。

その頃、役所からいろいろな情報が私のところに来ました。私も教員を辞めてから役所から頼まれた仕事を何度もやった関係もあり、当時の小高区役所村田総務課長とはよく知った間柄でした。それで、私は、村田課長に、神山のつつじが綺麗に咲いてるからと、事故の年も、二年目の時も役所に連絡していただきました。このような経緯でこの500日目の新聞の記事と写真ができました。

教員辞めてから何かやらなければと思い、でも自分の仕事だけでは駄目だと思い、少し地域の人たちに返してやろうと考えました。学校の教員をしていて、その間は地域の仕事はどれだけやったかということになると、心細いものがあります。父親が早く亡くなったことから、その代理ということでは多少の協力はしたのですが、やはり、勤め優先でした。常日頃から、地域の人に助けられたという思いがあり、仕事を辞めたら地域に何か恩返しをしたいという気持ちがあったのです。

4、「友愛の里」の下地

私は、小さい田んぼを少し整地し、また地球温暖化のことを踏まえ、

里山の手入れや遊休地の活用をなんとかしたいと考えました。自分の山から始めそして地域に返す……これを地域の人たちも真似をしていただけばればればいいと思いました。それで仕事を辞めた年は定年より一年早かったのも、何の役も回ってきませんでした。

この年は、全て自分の時間になりました。まず、減反政策により、減反したところに何か作物作れば補助金が出るということから、若い兼業農家の人たちが組合を作って始めるというので、私は、役所との庶務的な仕事を引き受けました。学校の教員だったことから、教え子が役所にいてそれなりの地位についていたので、その教え子にいろいろ教えてもらいながら手続を行ったのですが、その時、農業にいろいろな補助金がついていること、それが良く生かされていないことを知りました。そこで、遊休地を活用するようにしたのです。

最初は、減反した田んぼに蕎麦を植え、植えるだけで収穫は別にして補助金が入ってきました。400万円の刈り取り機を買うと、200万円の補助が市から出ました。あとの200万円は自分らで稼ぐのです。隣の集落も、同様にして蕎麦を作りました。私たちが刈り取り機を持って行ってその蕎麦を刈ってあげると、反当りで刈り賃をいただき、一年で元がとれました。しかし、蕎麦は、田圃で作っても収穫はほんのわずかしかとれません。そこで、3年目には大豆に転換しました。大豆も畑でとれるものなので乾田にしないと駄目です。

年の暮れに、蕎麦を打って御苦労会をやろうと蕎麦打ちの先生に来てもらいました。蕎麦祭りをやりましたが、その時に、営農組合の会長さんが、神山を「友愛の里」にしようと言ってきたので、「いいね。」ということになりました。それから、震災まで12月の蕎麦祭りには「友愛の里」という名前が付けられました。「友愛の里」での行事は蕎麦打ちばかりでなく、8月末には、大運動会やバーベキューをしたり、若い人は氷水を作ったり、そういうことも行いました。

以上のことから、「友愛の里」には下地があったのです。昔からの大字を単位にした16行政区による東部地区大運動会が10月には開催されていました。私たちの集落は小さいけれど足の速い人が多かったので、運動会となると皆張り切ってまとまりました。運動会では、地区対抗がありますが、負けるのは綱引き、勝てるのは大縄跳びやリレーです。運動会には子供も老人も皆が集まって来ます。老人向けにはゲートボール、青年向けには大縄跳び、二人一組のアベックバスケットボール競技、

紅白の玉入れなどです。これらの種目を地区で練習することによって、皆でまとまり、繋がりができました。私が教員を辞めた頃（平成9年）がそういう一つの時期でした。

神山には伝統芸能としての神楽があり、若者たちが獅子舞を毎年正月に舞って歩きます。就職して都会に出た人も正月になると帰ってきます。神山集落の34戸は、若者は学校を卒業すると東京や福島などの都会に出てしまいます。しかし、出たり入ったりでほとんど変わりはなく、そこにまとまりがあります。土地の所有者が決まっていて、新しい家を構えるということはほとんどありません。交通の便がいいわけでもない。農業をやるといっても広い土地を得ることもない。住宅地でもありません。人が入るような余地とか、そういう条件はそろっていないところです。

非常に保守的かもしれないし、財布の底まで知っているかは別にしても、隣近所のことをお互い知り尽くしていて、ある面で息苦しさもありました。お嫁さんに来た人には、少し辛いものがあつたかもしれません。男性たちにとっては、親から子へと代々受け継いできた土地で、経済的に豊かではなくてもそれなりに生活できた場所なのかもしれません。

だから人は増えませんでした。一時期増えたのは終戦後の開墾によるです。集落から出た二男三男坊が戦争に行つて帰つてきて、実家に帰つても身の置き所がなくて、そのうちに大地主の土地が解放になり開墾が始まりました。私の知っている範囲では9戸が開墾に入りました。その人たちが開いた土地は畑だったのですが、高度経済成長の時代にまた出て行つてしまい、半分ぐらいはまた山に戻りました。だから一時期人口は増えましたが、また元に戻つたということです。「通信」の中に小字の由来を長老の方に書いてもらっていますが、今の若者は知らないこの開墾の話を、近い将来、書いてもらおうと思っています。

5、神山の人たちの避難生活

「通信」も、最初は、よそに避難していた地域の人がいっぱい手紙を書いてくれました。ところが、今は皆、近くに戻つてきて、私等の年代の人たちは近く（福島県内、南相馬市など）に住んでいるので、手紙を書く必要がなくなりました。孤独死もあるから、なるべく、2か月に一度ぐらいは集まりを持つようにしたいと思っています。

現在「通信」に書いてくれる方は、東京に避難している山田シゲ子さ

んぐらいです。この方は待ち遠しいと言ってくれています。最初は、それぞれ便りを出してくれていたのですが、最近あんまり来ません。でも、待ってくれている人もいるので、「通信」を月に一回ぐらいは出したいと思っています。何かないと続かないから、原発詩集については、いい詩集が出ると出版社に電話して、「この詩集素晴らしいね、こういうわけはこの詩集、私の『通信』に載せていいですか。」とお願いすると、出版社が提供してくれるのです。そこから引用して原発の詩を載せたりしています。詩集『原発難民の詩』からも載せましたが、それを出版した富岡町の佐藤紫華子さんは、今はいわき市にいます。

先に述べた東京にいる山田シゲ子さんは、子どもは3人いて、1人は浪江に嫁いで、2人目の長男は亡くなってしまい、3人目の二男は横浜で今も勤めています。旦那さんは亡くなってシゲ子さんは現在、一人です。旦那さんは私の先輩ですが、ポン友で、酒飲みで、結局酒で命を縮めました。何でも話せる先輩で、妻のシゲ子さんも私のことをある意味では頼ってくれています。この人の舅爺さんからも「章生ちゃん、シゲ子助けてな」と言われていました。

シゲ子さんが東京までどういう風に行ったのかはわかりません。避難は途中までは一緒にいました。11日は一緒に神山公会堂にいて、2日目は集落の人皆で体育館に逃げました。3日目も4日目も体育館で過ごしたのですが、14日の日中に、これからはそれぞれの行動にしましょうと皆で話し合いをしました。シゲ子さんは浪江に嫁いだ長女のところに連絡し、引き取ってもらい、その後、長女が横浜にいる息子さんのところへ連絡したようです。

その二男は、震災後に一度だけ、自分の家を見たいと、今居る私の家を訪ねてきました。現在は、長女の娘さんが東京にいて、働きながらシゲ子さんを助けているそうです。シゲ子さんはこちらに戻りたいと言っていますが、もう戻れないことはわかっているのかもしれませんが。シゲ子さんは嫁いで58年と書いているから80幾つになります。

山田さんの他の神山の人達の生活の激変についても触れておきましょう。松倉さんは、私の住む鹿島区の、仮設住宅で奥さんと娘さんの三人暮らしをしています。息子さんは教員で相馬にいますが、その奥さんも教員で奥さんの実家の近くの白河にアパートを借りて一人の子どもさんと暮らし、夫とは別居しています。3世帯で別れ別れです。そういう家族が大勢います。本当にこんな事態になれば家族が別れ別れ

にならなくて済んだのにと強く思います。

34戸のうち、鹿島区の仮設にいたるのは12戸で、全体の約3分の1ぐらいです。私たちのような見なし仮設の者やアパートの人も加えれば、正確にはわかりませんが、半分近くが鹿島区にいたると思われます。34戸ですが、49箇所「通信」を出しています。1戸の家に二つ出しているところもあるし、十何戸は分かれ分かれなので、息子たち夫婦にも出しているのです。

家族が別れ別れになって、一番遠いところに住んでいるのは沖縄に居る富澤豊さん夫婦です。私の家の前に住んでいました。その息子の俊幸さんが小高にあった会社に勤めていたので、震災の後は日立の十王にもあるその会社に勤めるようになりました。社宅のアパートに住むようになった時、狭いので豊さん夫婦との同居は無理になりました。夫婦の一番下の娘が沖縄に住んでいて、沖縄に來いと言われたので、また小高にいた娘夫婦とその両親4人の計6人で沖縄に行くことになったようです。那覇市のマンションを世話してもらい、マンションの何階かに分かれて三家族で生活しているそうです。

富澤さんたちから便りがあります。私たちは、兄弟の次ぎぐらいに親しかったからです。毎日のように出入りして、朝、昼と毎日顔を合わせていました。私の家ではノンちゃんという名前の犬を飼っていましたが、ノンちゃんが騒いだと言えれば見に来てくれ、用事があって出かけるといえばノンちゃんの世話をしてくれて、自分の家に連れていってくれました。そういう仲でしたから、5日に一度程度は電話がありました。「通信」が行けば連絡が来ました。

今は、息子の俊幸さんが親たちと長い時間離れては生活はできないからと言って日立に一戸建ての家を買ったそうです。

平成28年4月を目安にして、私たちもどうするか、これから決断しなければなりません。

俊幸さんは、「親と一緒に生活するということで建売住宅を今度求めた」と、一番最初に電話をくれました。

神山の34戸は4つの班になっています。役所からのいろいろな配り物をするのが班で、本当の組内と言われるものです。お葬式などをやる時には、4つが2つ2つに分かれるのですが、本当の組内、隣組と言われるものが4つあります。私のところは3班で、ここは8世帯あります。

末永雅一さんは、娘さん一家が日立に求めた住居で、一緒に暮らして

います。避難途上、祖母が亡くなったといひます。まず末永さんは神山には帰ってきません。前述の山田さんも帰って来ません。それから「通信」に書いてくれている上野美真さんは、私の先輩で、息子さんたち夫婦は南相馬の市役所に勤めています。上野さんご夫婦は、借上住宅で原町にいますので、これからどうするかはわかりません。

それから、佐藤和子さんは、今回は書いておりませんが、よく「通信」に書いてくれます。娘の由紀恵さんは筆が立つ方なので書いてくれるのです。その由紀恵さんは子供と相模原にいて、佐藤さんは原町の仮設住宅に一人でいます。佐藤さんは、息子の近くで一緒に生活したいと言っていて、由紀恵さんもお母さんを引き取って多分相模原で生活したいのだと思うのです。由紀恵さんは現職の時には、小高にあるエプソンという会社にいたのですが、会社が山形県の鶴岡に行ったのでそこに行きました。なかなか筆も立つし、頭もよく腕もいいので会社でも重宝されたので、鶴岡に行ったのですが、給料が下がってしまい、1年位で辞めてしまいました。それで、相模原に行って、お母さんも引き取りたいと思い、お母さんと呼び寄せましたが、農家生まれのお母さんは相模原に行っても何もやることがないんだそうです。お金の問題じゃないんです。それで、今、原町の仮設にいて、時々娘さんのところへ行くのですが、この先はどうなるかわかりません。

その隣に、三条市に避難した吉岡さんがいます。この方は81歳です。奥さんが亡くなり、息子さんたちと一緒にいて、新潟県の三条市に避難しました。そのまま、現在も三条市に住んでいます。神山の吉岡さんの家は入れるような状態ではありません。壊れていて、そのまま雨漏りしているので多分入れないと思います。この方たちはほとんど帰って来ないし、息子さんたちも向こうでいろいろやってるようなので、もう帰ってこないと思います。

そして、すぐ前の家の、もう一軒の富澤さんは避難しているうちに、一番の働き手である50歳台の息子が亡くなりました。そのお母さんの智恵子さんは、102歳のお爺さんを抱えて仮設住宅で暮らしていました。かわいそうだって言って、東京にいる智恵子さんの妹がこの二人を引き取りました。夫を亡くしたお嫁さんは仮設で一人住まいです。

私の組内はそんな状態です。だから、もうコミュニティはズタズタになっている現状です。対策が一日でも二日でも遅れると、このような状態はどんどん悪化してしまいます。

日立の富澤さんも戻らないとは言いません。彼の家は財産もありますが、富澤さんの自宅は私の家よりも大変な状況ですので、直すのには一戸建ての家を造るくらいのお金かかると思います。私の自宅は、少しお金をかければ直るかもしれませんが。

皆の前でそんな事は言えませんが、線量なんてそれ自体は私は一つも怖いとも思いません。井戸水も同じです。しかし、この歳になって田んぼや山に行けず仕事もできない所で、何も好き好んで線量の高い場所で野菜を作る必要はないのではないのでしょうか。そんなものを食べる必要はないのです。だったら、私はどうすればいいのでしょうか。今、本当に迷っています。なぜなら、隣組もないのです。前の家もありますが、向かい側の家は、今、いわきの泉に一戸建ての家を借りて一家で住んでいます。息子さんが事業をやっていて、一家がまとまって生活しているのは、恐らく神山である家だけです。

6、こんなことで帰還できるのか

前の方の「通信」をみると、皆、「戻りたい」という思いがありましたが、最近は言わなくなりました。変わってきました。

シゲ子さんは、帰る希望を強く持っている話を福島にいる自分の妹さんにしたら、「おねえさん、とても帰れないよ。」と言われたそうです。シゲ子さんの妹さんは浪江なので、浪江の方は、福島や二本松、本宮など福島県の中通りにだいたいの方が避難しています。南相馬市にもたくさんいます。シゲ子さんの妹さんは本宮もしくは二本松にいて、帰れるときには浪江に車で来て、ついでに神山に回って家を見ていました。それで、もう帰れないと、その妹さんから言われたとシゲ子さんは「通信」に書いてきたのです。

それで私も「通信」につぎのように書きました。窓ガラスが壊れているけれども、手をかけられない。誰がどこで何を言うかわからないから手をかけられないのです。山田さんの家は実際手をかけないと住めないと思います。燃し風呂だから、薪が必要ですが、放射能の問題があるから、果たして薪が確保できるかどうか。その辺を行政がどう保証してくれるのか。そういうことが帰っていくための一つの条件です。

若い人が帰らないというけれど、年取った人も帰らないということが一番問題です。

風呂の問題は、水道は水を買えばいい、洗い物はなんとか井戸水でも

できるから、あとは検査をすればいいわけです。井戸はモーターで出るから、業者さんに来てもらえばいいのですが、それだっていろいろ気を使います。線量が高いから業者さんを入れていいのか考えてしまいます。今までは組内に水道やさんに勤めていた人がいたので、不具合はちょっと見てくれましたが、その人は今、日立に避難しています。

私たちが帰るためには風呂は必要だし、薪風呂が使えなければ、風呂を新調しなくてはなりません。もう年だから、業者が来てくれるかどうか問題です。除染が終わって、絶対、ここが大丈夫となったら業者を頼みますが、万が一、来てもらって病気になったてしまったら嫌だから、簡単には業者には頼めないのです。

28年4月が避難解除の目標です。これから市長が住民説明会を開き、住民が受け入れるかどうかの問題になっています。まずそれをクリアし、水のクリアもあるし、放射線で汚れている家の中の掃除もあります。高齢になって一生懸命掃除したら、終わった時に倒れてしまうかもしれません。高齢の母のたつての願いを考えると、早く家に戻りたいと思いますが、でも、放射線で汚れたところに帰るのは少し気味悪いと思います。家の中は0.1マイクロシーベルトです。いろいろなところに付着して、雑巾掛けをやればなんとかなるのかなあって思ったりもしますが、不安は拭い切れません。

帰還を考える時に、経済圏という問題もあります。浪江町は神山の経済圏です。そこが元に戻らなければ神山はどうしようもありません。だから、そういう地域の人たちの経済的実状をしっかりとわきまえた行政が必要とされていると思います。それは決して自分一人だけのことではなくて、神山全体のことを考えて言っているのです。神山は、市の水道、広域水道が入ってないんです。電気は浪江から来ます。だから、最終的には市の行政、市長さんとしつかりと膝を交えて話をしたいと私は思います。

7、避難指示解除の時期がやってくる

田村市都路は避難指示解除になりましたが、でもまだ一割くらいしか、帰って来ている人はいません。その事実が実績になると思います。「通信」の35号に、今度新しく神山行政区の区長さんになった馬場昭久さんが、総会の席上で、これから市長さんと話をするための参考にしたいと言って「帰りますか?」「帰りませんか?」とアンケートをとったと

ころ、四分の一位の人が「帰らない」という答えであったとの文章があります。四分の一というのは、私から言えば、遠慮した数字だと思います。もし、区長さんが、市長さんと話をする機会があったら、この数字をまともに読まれたんじゃ困ると、私は言いたいのです。ほんとは帰れば帰りたいという希望があるから、まともには帰らないとは言えないと思うのです。私だって、今の家を捨てたくはないです。でも現実、じゃ帰るかといったら今の状況では帰れないのです。

東電が言うには、あと40年たたないと廃炉にならないとのことでした。私は40年は生きられないかもしれませんが、40年の間、びくびくして生活しなくてはなりません。今は津波がこないかもしれませんが。しかし、無防備なので、万が一、某国のロケットが間違っ飛んできたら、何が爆発するかわからない恐怖があります。

それから、今、燃料棒を第四号機から取り出していますが、これが一番危険です。また、地震が来て、途中で燃料棒を落としたら、一巻の終わりです。こういう怖さがある、わずか10キロメートルのところに、私たちは住んでたわけです。今住んでいる所は、少なくとも35キロメートルは離れているので、少しはいいかなと思います。もっと安全なところに行きたいと思いますが、行くところがありません。いろいろなことを考えると、行くことが出来ないのです。これは東電の方に言いたいです。

自主避難している方を悪く言うつもりはないのですが、この方々は、自主避難できるだけの力があるのです。その力がない人は自主避難できないのです。もちろんその力がなくても、頑張っ子どものためだと思っ自主避難している方も人もいます。

私は、子どもはおりませんが高齢者を抱え、自分自身も高齢であるし、放射能ほど怖いものはないけれど、自主避難ができないのです。高齢者の命を縮めるかもしれないし、兄弟とかの繋がりなどいろいろなことを考えると、そんなに簡単に動けるものではありません。本当のこと言えば、神山を追い出される理由はなかったのに、本当に悔しい思いでいっぱいです。

家には戻りたいと思います。本当に戻りたいです。ここでは、10キロ圏内の浪江に出ていく道しかないのです。あとは山道を出入りするしかないし、もっと直線的に北のほうに逃げる道はないのです。5日ぐらい前に、南相馬市はどこに逃げるかということについて、福島県が避難

経路を出しました。

原町を通過して飯舘通過して、須賀川に逃げる道を小高区の人には避難経路として示されました。それなら、神山から原町に直線で逃げられる道路を作ってくれと言いたくなりました。それが無いのですから。これは県が出したもので市長には責任ないけれど、市長さん、頑張って下さいと言いたくなります。

あと、万が一のことがあった時に、私たちに避難を呼びかける手段は、どうなっているのか、そのインフラができているのかを、一番、知りたいと思います。それから、逃げても帰れないことになったら、今まで作ってきたコミュニティと違うところに帰るのだったら、周りに誰も知っている人がいないようなところに行ったとき、果たして生活ができるのでしょうか。私は、絶対、生活できないと思います。そういうことも、どれだけ本当にわかっているのかなと思います。それに、若者が一人もいない所に帰りますか？

除染さえすれば帰れるというわけではないのです。避難指示解除準備区域になったから、もう解除になったのだらうというのが一般の意識なのです。解除準備区域になっただけで、まだ、全然、復旧は進んではいないのです。

新聞とか雑誌とかに出ている部分ではなく、出ていない部分も私は知ってもらいたいと思います。原発に近い方々、他の県で原発近くに住民の人たちに、原発事故が起こればこういうことになるんだよって、是非、知っていただきたいと思います。

最後にもう一つ考えなければならないことがあります。私が危惧しているのは、子どもの教育のことです。私たちの卒業した小学校は子どもがいないので、廃校になると思います。今は二、三人でも子どもがいれば、校長先生がいて学校の名前があります。しかし、私は、分校でないのに分校のような状態で子どもたちを学ばせること自体、反対です。もっと、沢山の子どもたちに囲まれた環境で学校に通わせてやりたいのです。福浦の小学校は将来なくなった方がいいと思います。もし、あったとしても二、三人の学校ですし、そのような状態では分校と同じです。長く続くはずがありません。

小高区の小学生は10人に満たないのです。小高区には小学校が4つありますが、1校で二、三人だったら一か所に纏めた方がいいと思います。仮設校舎で彼らを6年間学ばせることを考えると、私が親だったら

涙が出ます。

スクールバスでも何でも出して、今の小学校をみんな統合した方がいいと思います。ただ、スクールバスだって、現実には1時間バスに揺られて通ってくることになるので、小学生に1時間のバスはきついと思います。朝早く起きなければならない親も大変ですし、子どもにどれほどの負担をかけているかわかりません。小高の小学校の校長先生や先生方の意見とは違っても、私は、私の意見をはっきり言うつもりです。

原発で事故が起きたら、こういう事態が必ず起きるのです。このようなことはどこでも報道されていませんが、学校もなくなるのです。

付論 原発城下町と企業内教育

以前から原発は怖いものだと思っていました。私も、双葉町に勤めたことがあります。あそこでは原発に対して安易な事は言えないのです。やはり、原発城下町なので、所在町村が賛成したから原発が建設された訳なので、それは大熊町でも双葉町でも同じです。

旧小高町は原発に反対して、東北電力の原発を作らせませんでした。その意味では、小高は主流ではなかったし、ずっと世の中で言えば反主流でした。もし万が一事故が起きたことを考えて、制御できないから絶対駄目だと言って来た人たちが多かったのです。

でも、原発があると出稼ぎしないで、原発で仕事ができるということがあるわけで、余り大きな声は出せない部分があります。その点が難しいところです。原発によって恩恵は受けたと言えば受けたのだと思います。お金を貰うのは下請けの下請けで、メンテナンスの仕事です。原発の稼働時間は少なく、その稼働時間を除いた時間はメンテナンスを行います。そうすると、そこで地元の人も作業員として働きます。お金は中間マージンを取られるので余り貰えません。私は双葉町で学校に勤めていたので、それはよくわかっています。

東電に勤めている人は社宅に入っていて、羨ましいくらい、いい生活をしていました。ですから、双葉町の人たちは、学校を卒業したら東電はいい所だから東電に勤めさせたいと思ってました。

そうすると、学校の教員としては、親の願いを叶えてやりたいと思いました。いかにそれを叶えさせるかというと、東電学園というのがあります。中学校卒業後、東電学園に入り、そこで勉強すれば、高等学校の資格が取れて、東電に就職できます。火力、水力、原発の各発電所へ、

その他配電関係とかいろいろ分かれるらしいのですが。親から、「先生、息子をなんとかここに入れねばか」と相談されます。地元なので、親から言われて、本人は勉強を頑張って、そして、学園を受けて合格すれば、大変な喜びです。「いやぁ先生どうも。本当、ありがたい」って言われました。

東電に入れた教え子と、その後行き来とか文通はしていました。3・11の前には、同期会やったりとか、結婚式とか、そういう時には、行き来しました。震災後は、双葉町の人間なので、おそらく、家族もばらばらになってしまい、彼らもどこに行っているか、彼らが私がどこに避難してるか、わからないのです。柏崎の方にでも行ってるかもしれません。東電学園卒業で技術者だから、東電福島原発の所に残ってる人は結構いると思います。知ってる人では、青森にも行っている人もいます。六ヶ所村や東通村にも行ったりして、震災後は連絡はありません。

双葉でも福島でもなく、東電学園は横浜の方にあります。東電学園の生徒は、家に残ってもらうと言う理由で、大学卒ではないけれども、東電には間違いなく就職でき、言うならば地元に戻って安定した職業に就くことを求める親としては良かったのではないのでしょうか。

日立製作所には日立専修学校というものがありませんが、それと同じです。卒業すれば高卒の資格と、あと間違いなく日立製作所に入れます。ここでは、東電学園ができる前は、原町にも日立工場がありましたから、日立に行きたと言っていた生徒を、私は日立専修学校を受けさせました。企業内のこのような学校を受ける子どもはいて、日産もトヨタもみんな企業内学校があったのです。地元の工業学校を出ても必ずしも就職の保証はありませんが、企業内学校を出たら必ず保証されたのです。だから大学まで行くのは大変だという考えと、あと就職を心配する必要がないという思いで、大学まで行かないという人は、企業内学校を選んだのではないのでしょうか。

なぜなら、日本一流の企業だし、授業料は無償です。あとは何年生かになって実習などすると給料をもらえたそうです。日立の専修学校は本当に選ばれた人間でした。工業学校の子どもの採るよりは、企業内で養成して完全に即戦力として使えるから、企業としてはメリット以外の何ものもありません。大きな会社は、このような教育制度を持っていた。

(注：この陳述書は、2014年5月6日に原告共同代表者である相沢一

正氏からインタビューを受け、その内容を文章化したものをもとにして作成したものです。)

以上